

# どこかに生きながら

小川未明

青空文庫



子ねこは、彼が生まれる前の、母ねこの生活を知ることでは  
 きなかつたけれど、物心がつくと宿なしの身であつて、方  
 々を追われ、人間からいじめつづけられたのでした。母ねこ  
 は、子供をある家の破れた物置のすみへ産み落としました。こ  
 こで幾日か過ぐすうちに、子ねこは、やつと目が見えるようにな  
 りました。そして、母親の帰りがおそいと、空き箱の中から、  
 明るみのある方を向いて、しきりとなくのでした。もし母ねこが、  
 その声をききつけようものなら、急いで走つてきました。そして、  
 箱へ飛び込むや否や、子供に乳房をふくませたのであります。  
 しかし、ここも安住の場所でなかつたのは、とつぜん物

置<sup>き</sup>へきた主人<sup>しゅじん</sup>が見<sup>み</sup>つけて、大<sup>おお</sup>いに怒<sup>いか</sup>り、

「いつ、こんなところへ、巢<sup>す</sup>を造<sup>つく</sup>ったか。さあ、早<sup>はや</sup>く出<sup>で</sup>てうせろ

！」と、ほうきで、たたき出<sup>だ</sup>そうと、追<sup>お</sup>いたてたからでした。あ

われな母<sup>はは</sup>ねこは、あわてながら、かわいい子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>をくわえて、逃<sup>に</sup>げ

出<sup>だ</sup>すより途<sup>みち</sup>がなかつたのです。空<sup>あ</sup>き地<sup>ち</sup>をぬけ、林<sup>はやし</sup>のある方<sup>ほう</sup>へと、

いきました。

そこには、小<sup>ちい</sup>さな祠<sup>ほこら</sup>があつて、その縁<sup>えん</sup>の下<sup>した</sup>なら、安<sup>あん</sup>全<sup>ぜん</sup>と思<sup>おも</sup>つ

たのでしよう。けれどそこは湿<sup>しつ</sup>気<sup>け</sup>にみち、いたるところ、くもの

巢<sup>す</sup>が、かかつていました。それだけでなく、野<sup>の</sup>良<sup>らい</sup>犬<sup>ぬ</sup>の隠<sup>かく</sup>れ場<sup>ばしよ</sup>所<sup>しよ</sup>で

もあるのを気<sup>き</sup>づく、また、そこを一<sup>こく</sup>刻<sup>はや</sup>も早<sup>さ</sup>く去<sup>さ</sup>るのをちゆうち

よしませんでした。母<sup>はは</sup>ねこは、べつに心<sup>こころ</sup>当<sup>あ</sup>たりもなかつたから、

子供を口くちにぶらさげたままふたたび町まちの方ほうへ引ひつ返かえしたのです。  
 秋あきも末すえのころで、町まちの中なかは、いたって静しずかでした。その日ひは、  
 風かぜもなく、青あおい空そらから、太たい陽ようが、あたたかに、家いえ々いえの屋や根ねを  
 照てらしていました。母ははねこは、窓まどの開あいた、ふとんを干ほしてある、  
 二階かい家やが目めにつくと、大だい胆たんにも塀へいをよじのぼりました。いまは、  
 どんごんな冒ぼう険けんをしても、子こねこのために、いい場所ばしょを探さがし出ださな  
 ければならぬと思おもったのです。さいわい人ひとがいなかつたので、す  
 ぐ座ざ敷しきへつれてきました。自分じぶんも、かたわらへながながと臥ねて、  
 乳ちちをのませました。これが、いつまでもつづくものなら、母子おやこの  
 ねこは、たしかに幸こう福ふくだったでしょう。普ふ通つうの飼かいねこなら、  
 ぜいたくでもなんでもないのだが、二匹ひきには、許ゆるされぬ望のぞみであ

りました。わずかばかりの安息あんそくが、恐ろしいむくいおそで、仕返ししかえされねばならなかったのです。はしご段だんを上のぼってきた、おかみさんが、大騒おおさわぎをして、なぐる棒ぼうを取りとにきました。おかみさんは、宿やどなしねこに入りはい込まれてはたいへんだ。こんなことが、二度どとないように、こらしめるとでも思おもったのでしよう。しかし、彼女かのじょのもどつたときは、二匹ひきのねこの姿すがたは、もう見えませんでした。

重なり合うかさあように、建ち並ぶ家々いえいえの屋根やねは、さながら波濤はとうのごとくでした。地ちの上うへですむことのできないものは、ここが唯一ゆいの場所ばしょであつたかしれません。二匹ひきのねこは、もう降りようとしませんでした。ときどき、おびやかすように、ものすごい木枯こがら

しが、吹<sup>ふ</sup>かなければ、なおよかったのです。

「おまえは、どこへいってもいけないよ。じつとして、私<sup>わたし</sup>の帰<sup>かえ</sup>るのを待<sup>ま</sup>つておいで。」

母<sup>はは</sup>ねこは、こう子<sup>こ</sup>ねこにさとしたのでした。高<sup>たか</sup>い家<sup>いえ</sup>にはさまれて、目<sup>め</sup>立たない平<sup>ひら</sup>家は、比<sup>ひ</sup>較<sup>かく</sup>的<sup>てき</sup>風<sup>かぜ</sup>もあたらなければ、日<sup>ひ</sup>が射<sup>さ</sup>すと、ブリキ屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>から陽<sup>かげ</sup>炎<sup>ろう</sup>の立<sup>た</sup>ちそうな日<sup>ひ</sup>もありました。子<sup>こ</sup>ねこが、一<sup>ひとり</sup>人<sup>ある</sup>歩<sup>ある</sup>きさえしなかったら、ここは、どこよりもいいところだったにちがいありません。しかし、いくたびとなく追<sup>お</sup>われ、いじめられつづけて、そのた<sup>は</sup>びに母<sup>はは</sup>ねこが、命<sup>いのち</sup>をかけて守<sup>まも</sup>つてくれたのを知<sup>し</sup>っているので、子<sup>こ</sup>ねこは、いいつけにそむくことはなかつたのです。

母<sup>はは</sup>ねこは、後<sup>あと</sup>に残<sup>のこ</sup>した子<sup>こ</sup>ねこのことを心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>しながら、方<sup>ほう</sup>々<sup>ぼう</sup>のごみ箱<sup>ばこ</sup>や、勝<sup>かつ</sup>手<sup>て</sup>もとをあさったのでした。その苦<sup>く</sup>勞<sup>ろう</sup>は、けつして、すこしのことでなかつた。いかに氣<sup>き</sup>が急<sup>せ</sup>いても、なにか見<sup>み</sup>つからなければ、空<sup>むな</sup>しくは、歸<sup>かえ</sup>れなかつたのでした。

そのうち、塀<sup>へい</sup>をかき上<sup>のぼ</sup>る、するどいつめ音<sup>おと</sup>がすると、子<sup>こ</sup>ねこは、母<sup>はは</sup>ねこが歸<sup>かえ</sup>ったのを知<sup>し</sup>り、つづけさまにないて、ひさしの下<sup>した</sup>から顔<sup>かお</sup>を出<sup>だ</sup>すのでした。

そのとき、母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>のやせた姿<sup>すがた</sup>が、西<sup>にし</sup>日<sup>び</sup>を受<sup>う</sup>けて、屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>へ灰<sup>はい</sup>色<sup>いろ</sup>なが、長い影<sup>かげ</sup>をひきました。毛<sup>け</sup>のつやもなく、脾<sup>ひ</sup>腹<sup>ばら</sup>のあたりは骨<sup>ほ</sup>立<sup>だ</sup>っていました。彼<sup>かの</sup>女<sup>じよ</sup>は、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の無<sup>ぶ</sup>事<sup>じ</sup>だったのを喜<sup>よろこ</sup>び、持<sup>も</sup>つてきた餌<sup>えさ</sup>を与<sup>あた</sup>えました。そして、みずからの空<sup>くう</sup>腹<sup>ふく</sup>を忘<sup>わす</sup>れたほど目<sup>め</sup>を細<sup>ほそ</sup>

くして、子供こどもの食たべるのを見みて満まん足ぞくしたのでした。

冬ふゆの晩ばんには、寒さむい、身みを刺さすような北きた風かぜが、用よう捨しやなく、屋や

根ねの上うえを吹ふきまくりました。母ははねこは、子供こどもを壁かべのすみへ押おしや

るようにして、自分じぶんのからだで、風かぜをさえぎるだけでなく、ぬく

みであたためてやったのでした。そのため、子こねこは、安やすらかに

眠ねむることができました。それは、子こねこの生しょう涯がいにとつても、

またどんなに感かん銘めいの深ふかいことだったかしれません。

朝あさ、太たい陽ようが上のぼると、母ははねこは、また出でかけました。霜しもが真まつ

白しろに、雪ゆきのごとく、屋根やねへ降おりていました。その結けつ晶しようが、ち

かちかと、目めをさしたのです。子こねこは、身みぶるいしました。

いきかけた母ははねこは、ふりむいて、

「きようは、あとから、いいお天気になるよ。また、遊んであげましようね。」といいました。

この屋根の下には、どういふ人たちが、住んでいるかわからなかつたけれど、朝と晩には、若やかに、元氣のある話し声や、笑い声がし、昼間は、まったくしんとしているのをみると、若い者たちは、どこへか働きに通勤し、老人が留守をするごとく思われしました。たぶん、老人は、一人いるのでしよう、ときどきしやがれたせき声がきこえ、流しもとで水を流す音がしたのであります。ほかにいたずらをするような子供がいなかったのは、なによりのしあわせでした。

近傍にある、高いかしの木の落ち葉が、風に飛んできて、と

いや、ひさしの奥おくに、たまっていました。おりおり、それらが、龍巻たつまきのごとく、おどり出だすことがあります、二匹ひきのねこは、ひさしのすみの方ほうで、風かぜをさけながら、それをながめていました。ある日ひのことでした。太陽たいようのよくあたる屋根やねの上うえで、母ははねこと子こねこが、きげんよく、からかいあつて、遊あそんでいました。すると、どこからか、

「やせたお母かあさんの、お乳ちちしかのまないのに、あの子こねこは、よくふとっているのね。」と、いう話はなし声こえが、きこえてきました。それは、あちらの高たかい窓まどのところ、するのでした。こちらを見みながら、一人ひとりの少しょう女じょが、うしろの妹いもうとにいったのです。無心むしんでいるのを、おびやかしてはならぬと、二人ふたりは、姿すがたをねこに見みられ

ぬようにしていました。少<sup>しょうじよ</sup>女<sup>にょ</sup>は、手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>っていた、パンをちぎりました。とつぜん、なにか音<sup>おと</sup>がして、ねこのそばへ落ちました。おどろいた母<sup>はは</sup>ねこは、背<sup>せ</sup>を円<sup>まる</sup>くして、不意<sup>ふい</sup>の来<sup>らい</sup>襲<sup>しゆう</sup>者<sup>しや</sup>に備<sup>そな</sup>えて、身<sup>みがま</sup>構<sup>かま</sup>えをしました。逃<sup>に</sup>げるより、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>を守<sup>まも</sup>らなければなりません。四方<sup>ほう</sup>を見<sup>み</sup>まわしたけれど、敵<sup>てき</sup>らしいものの影<sup>かげ</sup>はなく、落<sup>お</sup>ちたのは、なんと香<sup>かう</sup>ばしい、バターのついたパンではありませんか。

「だが、こんなものを投<sup>な</sup>げたのだらう。」と、疑<sup>うた</sup>いながら、母<sup>はは</sup>ねこは、高<sup>たか</sup>い窓<sup>まど</sup>を見<sup>み</sup>あげると、姉<sup>きようだい</sup>妹<sup>い</sup>の少<sup>しょうじよ</sup>女<sup>にょ</sup>が、こち<sup>さと</sup>らを見<sup>み</sup>て、笑<sup>わら</sup>っていました。そのようすで、悪<sup>あく</sup>意<sup>い</sup>のな<sup>ない</sup>の<sup>のを</sup>悟<sup>さと</sup>りはしたけれど、な<sup>は</sup>お母<sup>はは</sup>ねこは、油<sup>ゆ</sup>断<sup>だん</sup>をせ<sup>ず</sup>、餌<sup>えさ</sup>に近<sup>ちか</sup>づこうと<sup>し</sup>ま<sup>せん</sup>せん

でした。

「あげたんだから、お食<sup>た</sup>べ。」と、少<sup>しょう</sup>女<sup>じょ</sup>が、安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>させるよ  
うに、いいました。子<sup>こ</sup>ねこはついに我<sup>が</sup>慢<sup>まん</sup>がしきれず、パンに近<sup>ちか</sup>づ  
きました。母<sup>はは</sup>ねこは、それを許<sup>ゆる</sup>すごとく、見<sup>み</sup>ていました。そして、  
自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>にやるつもりか、食<sup>た</sup>べようとしませんでした。少<sup>しょう</sup>  
女<sup>じょ</sup>が、また、パンをちぎって投<sup>な</sup>げました。

「こんどは、あんたにあげるのよ。」

母<sup>はは</sup>ねこは、前<sup>まえ</sup>に落<sup>お</sup>ちたのを、はじめて、静<sup>しず</sup>かに口<sup>くち</sup>へ入<sup>い</sup>れたので  
あります。

冬<sup>ふゆ</sup>の間<sup>あいだ</sup>じゆう、二匹<sup>ひき</sup>のねこは、このあたりの屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>をすみかとし、  
終<sup>しゆう</sup>日<sup>じつ</sup>、日<sup>ひ</sup>当<sup>あ</sup>たりをさがして、歩<sup>ある</sup>いていました。そのうち、春<sup>はる</sup>

となるころには、子ねこは、もうだいぶ大きくなっていました。

町裏に、隣組の人々によつて、耕された田圃がありま

した。そこには、黄色の菜の花が咲いていました。他の人には、  
気を許さなかつた子ねこも、かわいがつてくれる少女には、  
なつくようになりました。

そのころ、白い雲のあわただしく走る、空の下で、子ねこは、  
菜の花にとまろうとする、白い胡蝶を葉蔭にかくれて、ねらつ  
ていました。こうして、ふたたび、地上に降りても、いままで  
のように、母ねこは、後を追おうとせず、なるたけ離れて、気ま  
まに遊ぶ子ねこを見守るといふうでありました。

「もう、じきひとりまえになるのだもの、私は、そうついて歩く

まい。」と、いわぬばかりに、目を細くして、子ねこが、うまくちようをとらえるかどうかと、ながめていました。

これを、またそばから見ていた少女は、子ねこのようすが、

あまりかわいらしいので、足音をたてぬよう、うしろへまわり、

いきなり抱き上げると、ほおずりをしました。母親は、これも

見ていました。そして、このとき、子ねこの行く先を見ぬいたの

であろうか、「ニヤオ。」と、悲しそうに、一声高くなきました

た。そして、その声を残して、どこへとなくいつてしまいました。

それぎり、母ねこの姿を、このあたりで、見なかつたのでありま

す。

「お母さん、この子ねこを飼ってちようだい。」と、姉妹が、

いいはつたため、ついにその願いが、かなえられたのでした。

その後、子ねこは、雨にさらされることもなく、また飢えのために、眠れぬということもなかったのです。

「おまえのお母さんは、どこへいったでしょう。おまえは、みんなから、かわいがられてしあわせなんだよ。きつと、どこかに、おまえのお母さんは、いるでしょうに？」

こう、少女は、子ねこに向かつて、いうのでした。たとえば、こうして、向かい合っている間、そこには、人間と動物のへだたりがありました。考え方にも、ちがいがあるとみえて、畢竟なにをいつても通じなかったのが、少女には、悲しかったのです。

いよいよ冬ふゆが去さるのか、あらしの吹き荒すさんだ夜よるのことでした。  
 風かぜは、空そらから、屋根やねの上うへを吹きまくり、窓まどの戸とへつき当たりまし  
 た。じつと、耳みみをすました子ねこは、急きゆうにいらいらしだして、へ  
 やじゆうを騒さわぎまわり、外そとへ出でようとしました。

「なんだかようすが変へんだから、早はやく出だしておやり。」と、お母かあさ  
 んまでが、おつしやいました。姉あねのほうの少しょうじよ女よが雨戸あまどを細目ほそめ  
 に開あけると、すきまから、烈はげしい風かぜが、内うちへ吹き込こみました。

「この風かぜの中なかを、どこへいくの？」と、少しょうじよ女よが、いいました。  
 子ねこは、闇やみの中なかへ飛び出だして、さまよいながら、目めに見みえぬ影かげ  
 を慕したうごとく、悲かなしい声こえで、なきつづけました。

「ああ、きつと、母ははねこのことを思おもい出だしたのだわ。」と、姉あねと

妹は、<sup>いもうとかお</sup>顔を見合わせました。

あの屋根から、<sup>やね</sup>屋根を、<sup>こども</sup>子供をつれて歩いていた、やせた母<sup>はは</sup>ね

この姿が、<sup>すがた</sup>二人の目にはつきりと浮<sup>う</sup>かびました。

子ねこは、<sup>とお</sup>遠くの方まで、母を<sup>はは</sup>捜しにいったとみえ、<sup>かぜ</sup>風のとぎ

れに、そのなく声<sup>こえ</sup>が、かすかにきかれました。かつて、<sup>さむ</sup>寒い、<sup>さむ</sup>寒

い、<sup>こが</sup>木枯らしの吹<sup>ふ</sup>く夜、<sup>よる</sup>そして、<sup>しも</sup>霜のしんしんと降<sup>ふ</sup>る夜明<sup>よあ</sup>け方<sup>がた</sup>、

母<sup>はは</sup>ねこに抱<sup>だ</sup>かれて、<sup>やす</sup>安らかに眠<sup>ねむ</sup>った、なつかしい記憶<sup>きおく</sup>が、はしな

くも<sup>かぜ</sup>風の音<sup>おと</sup>によって、<sup>おも</sup>思い起<sup>お</sup>こさせられたのでありましょう。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「童話」

1946（昭和21）年7月

※表題は底本では、「どこかに生《い》きながら」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# どこかに生きながら

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>